慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	若きシュプランガー(I) : 1900年以前のシュプランガーに関する歴史的比較考察
Sub Title	Die geschichitlich vergleichende und analysierende Betrachtung über den jungen Spranger vor 1900
Author	山元, 有一(Yamamoto, Yuichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.49 (1999.) ,p.21- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000049-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若きシュプランガー (I)

——1900年以前のシュプランガーに関する歴史的比較考察——

Die geschichtlich vergleichende und analysierende Betrachtung über den jungen Spranger vor 1900.

山　元　有　一*
Yuichi Yamamoto

Für EDUARD SPRANGER (1882-1963) war Berlin von großer Bedeutung. In seinem jungen Alter vor 1900 entwicklte Berlin zur Großstadt und brachte ihm zu das Krisebewußtsein von dem folgende: 1. der Veränderung der traditionalen und durch Bildungsbürgertum konstituirten Sozialordnung im Prozeß zur Massengesellschaft; 2. der Zerfall der protestantisch und gemeinschaftlich übereinstimmenden Lebensgefülle, dem Wort SPRANGERs nach, des "Zusammengehörigkeitsgeistes"; und 3. der radikal angesprochenen Individualisierung oder der Relativismus der Perspektiven in den verschiedenen Gebiete wie Wissenschaft, Kunst, Politik, Religion, etc.. Diese Stadt war aber auch die Hauptstadt des Preußens, die den nationalpolitisch-geistige Einfluß auf den jungen SPRANGER ausübt hat. Seinen Preußentum erförderte Gymnasium zum Glauen Kloster, in dem er lernte. Und zwar erhob es seine neuhumanistischen und deutschen Bildung, deren nationalerzieherische Inhalt in Gymnasium überhaupt teils durch Vortag Kaisers auf der im 1890 stattgefundene Reichsschulkonferenz bestimmt ist. Unter Betrachtung von der sozialen Herkunft SPRANGERs zugehörte er nicht zu Bildungsbürgertum. Er wird erst durch Gymnasium Kulturelite, deren Abiturprivileg aber teilweise mit dem im 1901 neugestalteten Höhereschulwesen auflöschend fiel. Wir können daran sagen, daß er das Mitglied der letzte Generation war, die zu ständischen Gnaden von Gymnasium kommt. Was Berlin, Preußentum und Gymnasium dem jungen SPRANGER gab, das sich in seinem Aktionen und Schriften erklären ließ, wenn wir die Einflüsse von dem politischen Aspekt begrenzen.: z.B. Jasagen für Deutschenationale Volkspartei, die die Wiederaufstehung des Kaiserreichs behauptet hat; Sicheinstellung auf Ablehnung gegen die zu individualle Interesse orientierten und die politische Situation atomisierenden Arithmetik der kollektiv unsittlichen Parteipolitik für einheitliche und geintegrierte "Nation"; Vorbehaltung der demokratischen Parlamentarismus, insbesondere der Sozialdemokratie, im seinen 1920 ten Schriften wie "Kultur und Erziehung", "Lebensformen" etc., während sein Vertauen auf Bürokratismus. Für SPRANGER war die Zeit vor 1900 das "Urbild", das seine politische Tendenz begründet ist. Kontinuierlich leistete es nach politischen Wandel von 1918. In diesem Sinne können wir ihn "Verspäteter Bildungsbürger" nennen.

はじめに

初期エドゥアルト・シュプランガー (Spranger, Eduard 1882-1963) に関する研究は，いくつかの例外を除いて余り行われてはいないのが現状であり，行われている場合でもあくまでも彼の哲学，教育学の学的形成史を目的としたものが多い[1]。無論，そのような方法は十分な正当性を持っている。けれども，シュプランガーの（「生」の哲学的な彼自身の）生涯が行為と思索，教育（学）と哲学，時代の精神的状況と理想または規範といった対をなす要因によって貫かれていること[2]を考え合わせれば，そのような論述は一面的，つまり後者のみに眼

* 松阪大学女子短期大学部幼児教育学科
（近代ドイツ教育思想史）

差しを向けたにすぎないとも言えるであろう。そして，ボルノーが言うように，「生涯全体に渡って関心の対象となり続けるテーマが（シュプランガーの初期の研究に）再三再四認められる」[3] のであれば，なおさらシュプランガー初期研究においては，彼の思想と現実生活との結節点を求めることが必要であると思われる。確かに，このような現実生活からのシュプランガー理解は，彼の論文の詳細な学的研究を踏まえてであるが，既にいくつかの論文が存在することは事実である[4]。けれども，そうした先行研究は 1900 年以後のシュプランガーの現実生活に結びつけて語られることが多く，幼少期思春期との関連では話題も限定されている。その理由とのひとつとしてあげられるのは，幼少期思春期のシュプランガーに関する資料の少なさであろう。例えば，シュプランガーは第 2 次大戦終結後しばらくして「20 世紀の教授生活」[5] と題して，自らの生涯を回顧しており，そこで彼は自分自身の人生を 4 つの時期に分けている (P3, S. 343)。すなわち，ベルリン大学学生時代から教授資格取得を経てライプツィヒ大学での哲学教育学正教授時代まで（1900 年～1919 年），ヴァイマル共和国でのベルリン大学教授時代（1920 年～1933 年），ヒトラー政権獲得から第 2 次大戦終結までの国家社会主義時代（1933 年～1945 年），そして戦後のテュービンゲン大学時代（1946 年～1952 年）の 4 つである。この「教授生活」論文は，そのタイトルが示すように，大学教師という職業に直接関係する彼の人生を対象としているので，1900 年以前，つまり 18 歳以前の彼自身については時期区分に含めてはおらず，触れられた場合でもごくわずかである。とはいえ，このような事情は 1961 年に書かれた「小自叙伝」でもやはり同様で，幼少期及び思春期に関する内容も「教授生活」論文とさして変わらない。また，全集に収められている諸論文や書簡もベルリン大学入学以降に限られており，その点でも 1900 年以前の彼を知る手だては不足している[6]。しかしながら，シュプランガー自身も至るところで認めているように（例えば，P3, S. 343 や P4, S. 27 など），ベルリン大学入学以前，つまり学的生活からまだ遠い状況にあった時期も，様々な位相において彼の思想に影響を与えるエートスや学問や現実生活に対する問題意識が形成されていたことは疑いを入れない。そこで本稿では，資料の上でかなり限定されているシュプランガーの幼少期思春期を彼自身及び彼の周囲の人々が後年行った発言などを利用して再構成し，現実生活の側面からシュプランガー思想に近づこうとする。そして，そこで得られた内容を社会史的に時代状況や同時代人の大学教師と比較検討することも目指したいと考える。その際，1900 年以後の彼の活動や思想をも参考にしながら，彼の思想的連続性を確認する作業も欠かせないであろう。そこで得られる観点は，大まかに言って，成長期の彼が暮らしたベルリンの彼に与えた政治，宗教，人文主義的教養（学問ないしは世界観）の 3 つである。これらはシュプランガーの同時代に対する危機意識を形成させるとともに，その解決の鍵を与えるものともなっている。そこで本稿の後半部分では，それらのうち政治的側面に限定して考察を進める。しかし，本稿はシュプランガーの晩年の回想を用いて，若きシュプランガーとその時代状況を追理解するという点で，多少の方法論的矛盾を解決できない。このような事情のために，いささか推量まじりの研究ノートとならざるを得ないことは最初に断っておかねばならないが，本稿はシュプランガー思想の全体的理解に対する補完として寄与し得るものであると考える。

【 I 】

まず，シュプランガーの 1900 年までの成長と彼を取り囲む環境をできる範囲で再現してみたい。

エドゥアルト・シュプランガーは，ベルリン市内の街灯の電化が始まった 1882 年の 6 月 27 日同市南のリヒターフェルデで，父親フランツと母親ヘンリエッテとの間に唯一の子どもとして生を受けた。エドゥアルトの父方は 18 世紀以来ベルリンで製本業を，また母方はヴェストファーレンで製粉業を営んでいた。父親フランツはベルリンの中心地フリードリヒ通りで玩具店を経営する自営の商人 (selbständiger Kaufmann) であり[7]，エドゥアルトはその建物の 3 階で暮らしていた。父親が扱っていた商品は，積み木，錫の兵隊，人形などだったという (S2, S. 27)。

エドゥアルトが住んでいた区画は，区画の南にあるフランス人移住者が多かったことから名づけられたフランス通りから始めて時計回りに，フリードリヒ通り，ベーレン通り，シャルロッテン通りに囲まれていた (P4, S. 21-25)。そして，ブランデンブルク門へと至る，通称「人生通り」と呼ばれたウンター・デン・リンデンから 2 区画南に位置していた。この区画は現在のベルリンにも確認できる。当時それは，ホルスト・クリューガーが言うように「国家，教育，哲学，文化的プロテスタンティズムの通り，（後の）ヴァイマル共和国の大動脈」(S3, S. 104，補足は引用者）のひとつであって，その周辺にはジャンダルメン広場にあるフランス教会と新教会（ノイ

エ・キルヘ)，ウンター・デン・リンデンを越えたところに位置するフリードリヒ・ヴィルヘルム大学（通称ベルリン大学）及び国立図書館，彼の区画の東側に位置する国立オペラや国立劇場，そして教育省をはじめとする各省庁が立ち並んでいた。けれどもこのような文化的雰囲気と同時に，彼が住んでいた区画に限定してみれば，彼の家の正面を通るフリードリヒ通りは，彼の成長期に大きなビア・ホールができるなど，「異常なほど飲み屋に恵まれており」(P4, S. 26)，「酒場通り」という別称も与えられている。少年シュプランガーの目撃した光景のひとつに，1882年から25年間プロイセン教育省で大学行政を担当しベルリン大学の哲学教育学講座を1894年に新設したアルトホーフの大学教授たちと連れだって飲み屋へと向かう姿がある (P4, ebenda)。彼の区画を囲む他の通りにも，地下酒場やワイン酒場が多々あり，「近くの劇場（おそらく国立劇場）で私を魅了してやまなかった神秘的な人々」(P4, S. 22, 補足は引用者）との出会いが彼の期待感を高めていた。また，彼の区画にはシュレジンガー楽譜書店やファーバー＝ニュルンベルク文具店などがあり，これらも彼の生徒時代を支えていた。このように様々な意味で，シュプランガーは自らも認める「生粋の都会っ子」(P5, S. 186) であった。とはいえ，シュプランガーが幼少期を過ごした頃のベルリンは当時まだ一地方都市であり，彼自身が述べているところに従えば (P1, S. 11)，ベルリンが世界都市となったのは1896年のトレップトー公園で開催された産業博覧会を境としてであった[8]。ブランデンブルク門から西側へ進んだところに位置していたサヴィーニー広場以降は，彼の幼少期にはまだ見渡す限りの景色で家々も少なく，また彼の区画から東へ進んだシュプレー川上流沿いのヴュールハイデ以降にはまだ工場の煙突もなかった (P1, S. 12)。しかし，ベルリン鉄道網の完成（1896年)，特定の顧客相手の注文販売方法を覆すヴェルトハイム百貨店の登場（1897年)，軌道馬車路線の電化（1898年～)，最初の映画館やガソリン車の登場（1899年)，そして高架及び地下鉄道の運行開始（1902年）など，ベルリンは急速にその姿を変えていった。そして，1900年直前では彼の区画は既に居住地域として適さなくなり，郊外への転出も始まるようになる (P2, S. 143)。シュプランガー一家も同様で，彼らは1899年にこれまで住んでいたベルリン中央部から新興地シャルロッテンブルク街へと転居している。このような事情は，シュプランガーが急速に大都市へと変貌していくベルリンで成長していったことを物語るものである。この点は，彼の思想形成への生活史レヴェルでの影響を考えるとき重要であろう。というのも，加速度的なテンポを伴う技術の進展，急速な産業化と同時に目立ってきた伝統の喪失という現象が，当時のシュプランガーにもおぼろげながら表面的な変化として察知されたからであり，それは彼の1900年以後の問題関心に大きく影響していると考えられるからである。

しかしながら，シュプランガーの成長期に生じた変化は，ベルリンの空間状況だけではなかった。都市化や産業化が進む中にもまだ残っていた宗教的雰囲気やプロイセン的なるものは，彼の記憶にはっきりと残しながらも，同時にその変質ぶりも感じさせている。シュプランガーが1899年まで暮らしていた先述の区画は，シュライエルマッハーの宗教的精神豊かなノイエ・キルヘの教区に属していた。「（私のような）古い世代の中には，19世紀の終わりの偉大な神学者たち（キルムス，キント，ニートリヒといったノイエ・キルヘの牧師たち）の記憶が未だに息づいている」(P2, S. 145, 補足は引用者)。彼の父親フランツは教区代表団 (Gemeindevertretung) のメンバーで，プロテスタント協会などにも参加している (P2, S. 139)。シュプランガー自身も定期的に行われる「教区の夕べ集会 (Gemeindeabend)」や日曜礼拝にも参加し，宗教教授を受けていたキルムス牧師から1897年3月に堅信礼を受けている。シュプランガーが後に語るように，ノイエ・キルヘは「教養教会 (Bildungskirche)」であり，「世界観的問題に対して方向づけられた高等教育機関が当時まだ存在しなかった」中にあって，その機能を有していた唯一のものであった (P2, S. 144-145)。しかし，1900年直前にベルリン中央部からの転居が始まっていたことと関係して，教区の構成員が次第に減少する。信仰形態も変化して「個人の教区」という現象が生じ，教区内の教会へ出向かなくなるという新しい習慣が起こる。また，宗教に直接結びつくものではないが，救貧制度のような伝統的共同体のシステムも機能不全に陥るようになる。これらも少なからず人口増加に伴う都市化や産業化に起因するものであったが，その中にあっても「近代文化の表象と調和する宗教性」がノイエ・キルヘには息づいていた，とシュプランガーは感じている (P2, S. 145)。このノイエ・キルヘ体験は，彼の核心部分のひとつをなしており，そこから学んだ信条は後々まで彼の拠り所となって堅く守られるものとなった。それは「目覚めよ，そして信仰のうちに立て，男らしく，そして強く (Wachet, stehet im Glauben; seid männlich und seid stark.)」(S2, S. 144) というもので

あった。それと同時に，そこから学んだ宗教的核心は，当時進みつつあったベルリンの急激な都市化との葛藤をシュプランガーの中に感じさせ，「哲学的側面へと芽が伸び始める」契機を与え (P2, S. 140)，キリスト教が時代に対して有する意義も見出させるようになる。それは例えば，ベルリン大学学生時代の書簡で次のように言い表される，「キリスト教はまだ汲み尽くされていません。それは現世における一定の態度であり，誇り高い理想が挫折してしまったところでも，生の可能性が存在するということを教える態度なのです」(P7, S. 8, 1904 年 2 月 29 日のケーテ・ハートリヒ宛の書簡から)。シュプランガーにとってキリスト教は，伝統の喪失の中でもなお墨守されるべきものとして捉えられつつあった。

シュプランガーのこのような宗教的体験とならんで，彼の成長期を彩っていたのが，世紀末ベルリンが持っていたプロイセン精神である。彼はそれを日常，具体的に体験していた。彼の印象に最も強く残っているのが，色鮮やかな軍楽隊のテンペルホーフへ向けての行進やカイザーがビスマルクやモルトケを引き連れて登場してくるパレード，特に春の大パレードなどであった。「各連隊はベルリンっ子にとって特別な感情的価値を持って」(P4, S. 27) 現れ，その光景はシュプランガーに「これが国家なのだ」(P4, ebenda) という理解へと至らせている。また，彼が「よく挨拶をしていた」老カイザーの 1888 年の葬儀も，これとよく似た印象を与えたようである (P3, S. 343 あるいは P4, S. 28)。ちなみにこの反応は，テオドール・レッシングと比較するとき，鋭い対照をなしている。ハノーファーで医師の子として生まれ，シュプランガーより 10 歳年上のレッシングは，同地の工科大学で哲学の私講師をしていたが，彼は幼い頃の 1879 年老カイザーとビスマルクがハノーファーを訪れた際，自らの堅い決意を実行に移している。それは「万歳」と叫ばず，挨拶もせず，「軽蔑している」と感じさせようと，教師に叱られるのを無視して帽子をかぶったまま刺すような眼差しを馬上の人々に向けたのであった[9]。レッシングと比べてみれば，シュプランガーがベルリンに育ったということには特別な意味がある。すなわち，それは大都市への変貌を感じながらも同時に，揺るぎない国家としてのプロイセンを肯定的に体験しつつ育ったということでもある。「プロイセン保守主義の究極の創造的な潜在力としての伝統」(S3, S. 103) を彼に与えたのがベルリンであった。このような体験は後の彼の政治的傾向に影響を与えている。

けれども一方，必ずしもプロイセンは安定した状態にあるとは言えなかった。彼の成長期は，産業化に伴う国家の発展，それに伴うベルリンへの人口流入が労働運動を引き起こし，労働者の利害を代表する政党（社会民主党）と国家の駆け引きの中で政治が行われ始めた時期でもあった。それに先だって既にカトリック政党（中央党）との政治的闘争も始まっていた。国家と職業官僚によって担われていた政治は，この時期次第に変化していたのである。先に宗教的雰囲気が失われつつあったように，政治という局面でも伝統的なあり方は喪失され始めていた。シュプランガーは後年次にように述べている，「ベルリンの発展がかなり急速であったために，それを受け入れることが非常に難しかった。……さらに内面的なものが危機に晒されてしまった」(P1, S. 13)。彼にとって，大衆化は宗教的側面では内面的空疎をもたらし，政治的側面では「責任ある意志を無力にする」(P1, ebenda) ように思われたのであった。社会化の過程がもたらしたこのような宗教的，政治的危機感は，「進むべき方向性を失った切迫感と……無力感」(P1, S. 16) として彼の目に映っていた。

ところで，シュプランガーは 1888 年，6 歳のときドローテンシュテティッシュ・レアールギュムナジウムの予備学校 (Vorschule) に入学する。当時，ギュムナジウムないしはレアールギュムナジウムに進学しようとする者は，予備学校に 3 年から 4 年間通うのが常であり，シュプランガーも 4 年間の就学の後，レアールギュムナジウムへ進んでいる。この間，彼は 10 歳のときにピアノも習い始めている。レアールギュムナジウムで 2 年半学んだ後，彼はそこで教えていたユダヤ人教師ジークフリート・ボルヒャルトの勧めにより，グラウエン・クロスター・ギュムナジウムの第 7 学年 (Quarta) に転学する。古典語を中心とする人文主義的ギュムナジウムであったグラウエン・クロスターは，当時ヨアヒムスタール・ギュムナジウムと並ぶ上流階級のためのよく知られた中等教育機関であった。そこの卒業生には 19 世紀前半にプロイセン美術学校の校長を務めたヨハン・ゴットフリート・シャードウ，ベルリン劇場，ヴェルダー教会を設計しヴィルヘルム・フォン・フンボルトによりプロイセン建築官に推挙されベルリン市設計を行ったカール・フリードリヒ・シンケル，体育教育を通してドイツ人の国民意識を高めようとしたフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン，そしてオットー・エドゥアルト・レオポルト・ビスマルクらがいた。また，シュプランガーの同時代人としても後にゲッティンゲン大学教育学担当として雑誌『教育』の共同編集にも携わった 3 歳年上のヘ

ルマン・ノールやミュンスター大学神学教授となる同級生ハインリヒ・ショルツらもそこでアビトゥーアを取得している[10]。シュプランガーはグラウエン・クロスターで「即物的な(nüchtern)義務の実現というプロイセン的精神の中で教育された」(P3, S. 343)と述べている。思春期の彼が実際に体験していたプロイセン的ベルリンの雰囲気は，このギュムナジウムを通してさらに彼の内面に意味を持つことになり，やがて「シュプランガーの全人生は，研究と義務の実現である」[11]と他者から評されるほど明瞭なものとして表れる。一方学業において，彼は「優秀な生徒で，すべての科目で輝かしい成績を期待されていた」(S2, S. 27)という。けれども，優等生シュプランガーが生徒時代考えていた将来計画は，音楽家（作曲家）であった[12]。当時の彼の音楽観を伝えるものに次のようなものがある，「(ベルリン生まれで後にベルリン歌劇場の音楽監督になるフランス・グランド・オペラの作曲家ジャコモ・）マイヤベーアがオペラ音楽の頂点に位置することは，私にとって疑いのないことであった。……マイヤベーアと同じように人気のあったリヒャルト・ヴァーグナーはまだ私の射程内にはいなかった」(P4, S. 22-21，補足は引用者)。現在では「ユグノー教徒」や「鬼のロベール」を除けば，さほど演奏される機会もないマイヤベーアだが，劇的な舞台効果や豪華絢爛たる音楽は彼の心を捕らえて離さなかったのであろう。結果的には多くの人々の忠告によって彼のこの希望は断念されざるを得ず，美的なセンスを保持しながらも彼は哲学への道へと進むことを決断するに至る。彼にとって最初の世界観拮抗の中で諦めざるを得なかった美的世界観は，後に「生かされざる生」(P3, S. 343)と呼ばれ，彼の著作の中に少なからず影響を残し続けることになる。ここで一例を挙げておけば，彼の著作の中には音楽的表現やレトリックが多用されていることをまずもって指摘できるであろう。ところで，彼を包み込んでいた時代の雰囲気は，芸術の面でも彼にある種の不安感を抱かせている。「方向性を失った」ベルリンの政治的宗教的状況を反映して，「内的な確実性を失った神経衰弱的世代」の作品，「社会問題（自然主義）と極端な個人主義（後期ロマン主義）争い」，「差異化された抒情詩」，「不毛な外面性ばかりが支配する」建築や彫刻が彼の目に留まっている(P1, S. 15-16)。ベルリンの都市化につれて発生した社会的緊張は，それを表現するものとしてまず文学の領域で自然主義を生み出し，フランスのように長編小説化の方向へは向かわなかったが，それでも時々の印象をそのまま記録する，いわばシュールレアリズムの「自動記録」にも似たスタイルを獲得するまでになった。同時にそのようなモダニズムと並んで郷土芸術(Heimatkunst)も存在し，この矛盾する二面性が世紀末ベルリンの芸術状況を規定していた[13]。これは後のドイツ表現主義と同様の基本的傾向を示すものとして考察に値するものだが，少なくともシュプランガーにすれば，他の領域と同じように芸術においても時代状況に対応した導きの星となるべき地平が提示されることがなかった。宗教，政治，芸術のいずれもが彼にとっては「世界観喪失の状態」(P1, S. 17)にあった。それは，言い換えれば，確固とした根幹を見失った相対主義化（個人主義化）の帰結であった。ベルリンはシュプランガーのこうした問題意識を醸成し，そうした中，彼は1900年ベルリン大学哲学部に入学する。

以上，20世紀転換期までの若きシュプランガーの成長過程を見てきたが，そこで特徴的であったのは，彼が，都市化や大衆化，言い換えれば「社会化の過程(Prozeß der Gesellschaft)」が生じ，それに伴い宗教的変質，政治的転換をなされつつあったプロイセン的色調を持つベルリンで，商人の子どもとして人文主義的教養を受けつつ成長したという点である。次節ではここで得られた事柄を，彼の個人的事情からもう少し拡大して共時的に考察していくこととしたい。

【 II 】

社会的出自から見た場合，後に大学教師となるシュプランガーはいかなる位置にあるのであろうか。彼の出自を比較の上で語れば，例えば，グラウエン・クロスター・ギュムナジウムでの同時代人，ハインリヒ・ショルツの父は，第2次大戦の爆撃を免れた「旧ベルリン」のマリア教会の聖職者であった(S4, S. 442)。また，ヘルマン・ノールの父は彼らが通うグラウエン・クロスターの教師であり，さらに祖父も同じ学校の教師を務めている[14]。一方，1910年代に知り合いとなり，20年代に共同で雑誌編集にあたることになる2歳年上のテオドール・リットにしても，彼の父親は上席教諭(Oberlehrer)であった[15]。いずれもが，いわゆる「アカデミカー」(大学卒業者）の子どもであり，教養市民層(Bildungsbürgertum)に属する人々であった。教養市民層は（実学でなく）大学教育を受けた（カトリックやユダヤでなく）プロテスタントの（経済市民層ではなく）文化エリートとして定義づけられる。職業で言えば，大学教師，ギュムナジウム教師，官僚，聖職者などであった。それは出生によらず，教養によって社会の上位に位置した層であ

り，上流中産階級を形成していた。その際，教養(Bildung)は人間性の全面的開花をもたらすものとして考えられており，実用的功利的学問や単なる職業上の知識を排する傾向が強く見られた。19 世紀初期にギュムナジウム教師のための国家試験（及びそれに必須の大学教育）が導入されたことから，教養市民層は，マックス・ヴェーバーの言葉を借りれば「精神的同族交配」[16]，つまり自己補給されることとなり，それに対応して教養市民層の補給経路から商工業層は閉め出されてしまう。これは階層的同族交配によってさらに支えられ[17]，そのような社会的閉鎖性は，教養市民層の中に功利主義的な見方に対する侮蔑と相まって，財産と教養の格差を作り出す。教養の「信奉者は，息子が商工業に入るとしたら，普通の場合それに反対し，失望した」[18]。しかし早くも同世紀後半には教養理念は形骸化し，資格による階層維持の，そして社会的威信の単なるシンボルにすぎなくなるが，教育制度上でのこの階層の再生産はシュプランガーの時代でもまだ続いていた[19]。いずれにせよ，多少とも教養市民層が動揺しつつあったにもかかわらず，彼の成長期には依然として教養はそれに対する等価物を持たない「社会の内部で身分的相違をもたらす最大の要素」であり，「教養の相違は……心のなかでもっとも強力に作用する社会的制約のひとつ」[20] であった。こうした点を踏まえれば，教養市民層とシュプランガーとの差異は大きかったことが直ちに分かるであろう。彼の父は確かに自営(selbständig)ではあるが，商人でありアカデミカーには属していない。父親の商売の規模は確証できないとしても，いずれにせよ，中間層(Mittelstand)のメンバーであることだけはほぼ間違いない[21]。当時，中間層は自らを，1896 年以前の大不況において新たに台頭してきた銀行や百貨店などの大資本とプロレタリアートといった社会諸勢力の緩衝器・バランス調節器であると規定していた一方で，その間にあって自らの立場が脅威に晒されているとも感じていた。それ故，中間層は経済的自由主義からの離脱の欲求を高めるとともに，当時の言葉を使えば，「黄金インターナショナル」と「赤色インターナショナル」がもたらした中間層の困窮の解決をプロイセン国家の保護主義的な政策に期待していた。こうして実際に行われた国家政策は「中間層の大部分にとって，官憲国家の権力機関への依存」を習慣化させることとなる[22]。このような中間層のメンタリティがシュプランガーに影響を及ぼしたことは想定してもよいであろうが，ここでは生粋の教養市民層と彼がどのように異なっていたかをもう少し見てみよう。

シュプランガーの場合の社会的上昇，別言すれば，中間層商人から大学教師，つまり当時のドイツ社会における「エリートの中のエリート」への上昇は，よく指摘される「初等教育教師(Volksschullehrer)の父から大学教師の子どもへ」という出世パターン[23]とも異なっている。彼は 1918 年，大戦中に書かれた「上昇の問題」で，一般的表現を用いつつ自らについて語っている，「まず父親は自分の才能と意志の力によって控えめな地位を手に入れる。……だが，彼の中で秘かな憧憬は満たされない。彼は息子たちに実現させようと考える。……父親が独学者として獲得したものを息子たちに与えてくれるのが，正規の学校教育である。大部分のアカデミカーは，このようにして，下級官吏，自営の商人(selbständiger Kaufleute)，教師といったグループから出て，身体と心の有利な教育を土台として有能さを示していく」[24]。シュプランガーのような階層（商人）から大学教師となるのは，19 世紀中葉から 20 世紀初頭にかけてでは，教養市民層がその内部から 50% ないしは 60% も輩出しているのと比べれば，10% を少し越える程度とわずかであった。しかも教養市民層は，シュプランガーが生まれた 1882 年を例にとってみても，職業全体の 5% ないし 7% にすぎないにもかかわらず，そこから膨大な量を供給していた[25]。ノールのような既に教養市民層に属する他のメンバーにとって，彼らが意識するしないにかかわらず，社会史の上でギュムナジウムが自分たちの階層を再生産する過程としての機能を有していたのに対し，シュプランガーの場合には不利な状況の中で社会的上昇を果さねばならなかったことがわかるであろう。ショルツがシュプランガーとの比較で語ったように，既にギュムナジウム時代から彼より「有利な状況にあった」とは言えない「シュプランガーは（人生に必要な多くの）道を自分自身で切り開いて行かねばならなかった」(S4, S. 442) のであった。ショルツが多くを父親から学ぶことができたのに対し，シュプランガーが父親から学んだのは「経済的な思考と具体的な形式に対する感覚」(S2, S. 27) であったことを考え合わせてみても，彼が恩師ボルヒャルトの助言があったにせよ，彼自身の「才能と学習」(Begabung und Studium) によってエリートの仲間入りを果したことが認められるであろう。

もちろん，彼の両親も一人息子の社会的上昇に期待を寄せていたようで，それは 1888 年の予備学校入学にも現れている。予備学校(Vorschule)は当時，一般に対して開かれた初等教育機関(Volksschule)とは別に設けられていたものであり，それは大衆と切断された形で教養

エリートを育成する機能を有していた。就学義務として通常4年の初等教育期間が必要にされるのに対し，予備学校では3年で中等教育機関に進ませる場合もあった[26]。それ故，予備学校は教養市民層の地位を保持し，その層を再生産するための保守的な性格，一般に開かれていないという意味で，非民主的性格を持っていた。この特権的性格は統計上にも表れている。『ドイツ教育史統計』[27] によれば，シュプランガーが予備学校に入学した1888年時点での予備学校生の全就学義務年齢到達者に対する割合は，プロイセン全体で約15.5%（15901人/102319人），このうちギュムナジウム予備学校生では全体のおよそ10.4%（10622人/102319人），レアールギュムナジウム予備学校生では全体の約4.5%（4637人/102319人）であった。ギュムナジウムだけに限定しても，ギュムナジウム予備学校からの入学者は約18.1%（10622人/58747人），レアールギュムナジウムに絞った場合では当該予備学校からの入学者は約16.6%（4637人/27942人）である。予備学校入学生の数は第1次大戦終結までおよそ2.5倍と増加し続けるが，就学義務年齢到達者に対する割合は1919年で19.8%（39495人/199543人）と相対的にさほど変化していない。そうしたことから，予備学校はヴァイマル期に廃止されるまで教養エリートの形成の第1段階を担ってきたと考えられる。加えて，当時ベルリンにはケルニッシュ，ヨアヒムスタール，グラウエン・クロスターをはじめとする16校のギュムナジウムがあったが，その数は学校選択の上でも他の諸都市と比較して確かにかなり有利であった[28]。しかし有利なベルリンの場合でも，1880年から1905年にかけて，つまりシュプランガーの成長期において，ラテン語なしの中等教育機関は，人口の急増と対応して2校から14校と急増しているのに対して，ギュムナジウムに限っては16校のままであり，ラテン語付きの中等教育機関を含めても23校からわずか1校しか増えていない。この点にも19世紀末のドイツにおける教育の民主化は進んでおらず，教養市民層の階層維持という旧来の保守的で閉鎖的な傾向が見られると同時に，ベルリンが必ずしも教育的に有利とは言えなかったことが推測できる。このように，シュプランガーの学校生活を見る際に注意しなくてはならないことは，彼が当時の狭き門をくぐり抜け，ギュムナジウムという保守的あるいは非民主的エリート層の作り出す排他的閉鎖的空間に成長して，そこから大学教師への道を選択していったということである。

ところで，シュプランガーの成長期を取り囲む社会状況は，既に触れたところだが，ここで今一度言及する必要があろう。ドイツでは1890年以降，農業人口と工業人口の比率が逆転し，都市への流入者が増加し始めていた。それに伴い，最大の受け皿であったベルリン市の人口はシュプランガーの成長期には，1880年の1,122,330人から1905年の2,040,148人へとほぼ倍増し，1900年頃には生粋のベルリン生まれは40%にまで落ちている[29]。こうした大衆化の状況に対する教育制度上のその具体的現れは，今述べたように，大衆中等教育（ラテン語なしの中等教育）が数多く提供されたことにも見ることができる。このような大衆への教育制度上の配慮は，1882年や1892年の教科課程に見られるように，産業の加速度的成長に対応して古典語科目を減少させたり実科的教育へ力を入れたりしているところにも表れている。無論，大学入学に関して3つの中等学校機関のうちレアールギュムナジウムと高等レアールシューレは，ギュムナジウムと同等の権利を得ることはなかったにせよ，それでもギュムナジウム出身以外の大学生が現れ始めた。シュプランガーが中等教育を受けたのは，教育制度上のこのような変革期に当たっている。そして，1901年，大学入学に対してすべての中等学校が同等の権利を有するようになって，事実上「ギュムナジウム＝大学への道」という等式が崩れ去る。それ故，シュプランガーの成長期に特徴的であったのは，まだこの等式がかろうじて可能であった時期なのであった。こうした意味において，シュプランガーは，以上のような時代の教育制度史的状況からしても特別な階層の中に成長したわけであり，ギュムナジウムという特権を持った最後の世代の一員だと言わねばならない。そして，ここには世代の違いを重要な要素として考慮に入れざるを得ない理由がある。というのも，この世代の違いは後に大きな溝を生起させる可能性を秘めていたからである。それは，ギュムナジウムで育ちほとんどがギュムナジウム出身者だけで構成される大学で学んだシュプランガーの世代が，やがてそのギュムナジウム特権世代が教鞭をとる際に今度は様々な中等教育を受けた学生たち，いわば，大衆化された教育世代に出会うことになるという歴史的事情からも理解できる。つまり，1901年以降中等教育を受けた世代とそれ以前の世代，言い換えれば，誕生年で1890年以前の世代とそれ以後の世代に分けられ，その前者にシュプランガーが属するということは，彼のその後の活動を考える際に非常に重要な意味を持っているのである[30]。そのような世代間の差異を例証してくれるのが，1903年生まれのボルノーが自分の学生時代を振り

返って行った発言である。少々長いが引用してみたい。「(シュプランガーが私たちの) 世代……のために重要な意味を持っていたことは，当時の青年たちの状況に身を置き換えてみなければ，……正しく理解できないだろう。もちろん，私たちに明快な構成能力が欠けているとあざけり，批判する教授たちもいた。たまにはシュプランガーでさえも，私たちに不信の念を抱かせることがあった。それというのも，聴講生たちが何らかの発言に関して大きな声で騒ぎ立てた場合に諦めがちな傾向が顔つきに認められるときがあったし，また憤慨した様子で講義から足早に退出した後，彼がドローテン通りの（酒場への）小さな階段を下りていくとき，私たちは（私たちの嫌悪の的であった）大人の雰囲気を認めるときがあったからである」(S1, S. 462-463, 補足は引用者)。こうした世代の違和感や「父に対する息子の反抗」（ピーター・ゲイ）として特徴づけられるヴァイマル期の世代対立を形成した一端は，シュプランガーが旧世代に属していることを認めていた（P1, S. 15 や P6, S. 13 など）からであり，その世代形成には大戦前，特に 1900 年以前に受けた教育が影響を及ぼしていたからあった。その際，シュプランガーがギュムナジウム教育を受けた時代のカリキュラムが，それ以前とは異なる新しいものであった点にも注意を払っておかねばならない。1890 年に開催された全国学校会議 (Reichsschulkonferenz) においてカイザー・ヴィルヘルム 2 世は，ギュムナジウムの課題がドイツ人としての国民的意識の高揚，健全で義務感を持って祖国に奉仕するドイツ人の育成にあること，そのためにドイツ語をその基礎とすることを発言した。これを受けて 1892 年の「プロイセン教科課程」で，ギュムナジウムでの科目時間数ではギリシャ語，ラテン語が軽減され，一方ドイツ語が強化され，体育が義務づけられるとともに，歴史ではホーエンツォーレルン家の功績を重視し，社会民主主義的思想の危険性を教育内容として含めることとなった[31]。このようなカリキュラムは当然，シュプランガーの政治的感覚に影響を与えたと考えられる。例えば，1915 年の聖金曜日のスザンネ・コンラートへの書簡では次のように言われている，「ビスマルクのような天才がドイツにとって……より効果的な指導者であったことを過去に感じなかった人がいるでしょうか」(P7, S. 70)。これは 1900 以前の教育と環境が彼に与えた影響を物語るものである。そして，それは彼にとって終始一貫したものであった。ショルツが語るように，「今日でもなお私（ショルツ）は，……プロイセン的色調（ショルツによれば，例えば「だらしなさに耐えられない態度」）を信奉していると告白してもよいであろうし，この点ではシュプランガーも近いところにいると思っている」(S4, S. 447 補足は引用者)。

しかし，この旧世代への帰属感を強める要素は，シュプランガーが入り込んだ特権的教育階層と同時に，彼が 1909 年にベルリン大学私講師以降関与する大学教師世界の中にも求められる。これは本稿の時代的限定を多少とも越えるものだが，以下の理由から本稿でも触れないわけにはいかない。第 1 にシュプランガーに影響を与える大学教師たち，例えばヴィルヘルム・ディルタイやフリードリヒ・パウルゼン，エーリヒ・シュミット，オットー・ヒンツェ (P6, S. 14) は既に 1890 年代には教鞭をとっていたが，かなり大雑把に言えばその人々もやはりシュプランガーと同様に旧世代，古き良きカイザー時代の世代，「クーアフュルステンダム以前の」(P6, S. 13) 世代に含み得るからであり，またシュプランガーのギュムナジウム・プロフェッサーたち[30]も，トライチュケに代表されるようないわゆる「プロイセン歴史学」の洗礼を受けていたと考えられるからである。大学教師の出自という点に注目した場合，1890 年以降教養市民層が部分的に解体し始めたにもかかわらず，大学教師の民主主義的傾向（あるいは大衆化）が認められるほど起こっていない点に，シュプランガーの旧世代的傾向を決定した社会的要因を見ることは可能である。リンガーが指摘するように，19 世紀前半まで経済市民層を出自とする大学教授がごくわずかであった事情は，1890 年前後を境として顕著な変化を見せている[33]。大学教師の出自は，依然として教養市民層が大きな割合（およそ 50%）を示してはいたが，それでも減少へ転じ，それに代わって工場経営者や大商人のような経済層が現れ始めた（10% 以下から 15% 程度へ)。それは「民主化ではなく，……大資産層が古い教養層を部分的に解体させた結果であった」[34]。シュプランガーの成長期には，教養と財産の社会的差異は明らかに小さくなりつつあった[35]。しかし，特権的教育階層の方はまだその事実を明確に捉えていなかった。例えば，ショルツは後年になっても「産業資本家や大実業家は，既に当時経済において集中する力を持ち始めていたが，大学という領域には侵入していなかった」(S4, ebenda) と言い，シュプランガー自身も回顧的にではあるが，自らの世代が持っていた体験の源泉をベルリン大学に求めつつ，「学問的地位の高さは揺るぎないものであった。私が属する 1914 年の世代の多くが，……ドイツを破局へと導くような……文化の転換点を前にしているとは思ってもみなかった」(P1, S. 15) といっ

た時代認識を述べている。それどころか，大学教師全体が教養市民層の解体に対する危機意識を持ちながらも[36]，「経済や産業に対する，労働者集団の経験世界に対する具体的な直観」[37] を持ち合わせていなかった。彼らにとって危機は「降りかかってきたものであり，自ら招いたものではなかった」(P1, S. 17)。これは教養市民層，殊に大学教師に特有のメンタリティを自ら的確に言い当てている。先に述べたように，1900年以降の中等教育における民主化は進展していたが，少なくとも大学の世界は以前のままであった。この事情はヴァイマル期に入っても変わっていない。「ヴァイマル共和国とその憲法によって定められた諸条件も，ドイツの大学教師たちの自己理解と学問や全体に対する責任を本質的に変えることがなかった」[38]。また，それは大学に限った話でもなく，「社会的諸階級は元のままだった。軍指導部は元のままだった。……諸政党も元のままだった」[39] のである。所属していた層からすれば，確かにシュプランガーは商人の息子であった。しかし，彼は成長期に当時まだ特権的であった教育階層の仲間入りをし，その後依然として19世紀的基調を保持していた大学での学生時代，大学教師時代を通して教養市民層的メンタリティを獲得していったのであり，その際，若き彼のベルリンでの政治的，宗教的生活環境がそれを強める前提を作り出していたと考えることができるであろう。そしてそこにはシュプランガーが時代に対してこれまでに述べた危機感を抱いていたことも作用していた。ヴィンクラーはビスマルク時代の社会変動の特質について，「市民的諸階層の伝統的指導グループへの社会的同一化が進んだ」ことを指摘したが[40]，シュプランガーの場合，中間層に出自を持ち，そのメンタリティを保持しながら，ギュムナジウムを通して教養市民層のそれを獲得していったという点で，このことは十分該当し得ると考えられる。

【 III 】

以上は，シュプランガーの成長期を時代状況に照らして明らかにすることを目的としていた。それでは次に，成長期のこのような環境が後々に与えたと考えられる影響，本稿では限定して政治的影響を，シュプランガーの著作や活動によりながら通時的に理解してみよう。その端緒として，シュプランガーがヴァイマル共和国時代にドイツ国家人民党 (Deutschenationale Volkspartei) の支持者であったという事実 (P3, S. 347) を取り上げてみたい。国家人民党は，共和制宣言からわずか2週間後の1918年11月24日に旧保守党員の大部分によって結党された[41]。帝政崩壊と共和制誕生という事態に直面して，他の政党と同様に「人民」(Volk) の側にあるように見せてはいた。しかし，ヴァイマル期におけるこの党の活動は「反ヴァイマル」であり，ヴェルサイユ条約やヴァイマル憲法を否定していた。また，入党の際，カイザーへの忠誠を誓うことが求められていたことからも分かるように，その基本的態度は君主制復活であった。ブリューニング大統領内閣以前では，ルター政府と第4次マルクス政府の折に，それぞれ3名と4名を入閣させている。この党に属していたのは，ゴットフリート・トラウプ，アルフレート・フォン・ティルピッツ，カール・ヘルフェリヒ，クーノ・フォン・ヴェスタープ伯，オスカー・ヘルクト，ヴァルター・グレーフ，ヴァルター・フォン・コイデル，マルティン・シーレ，アルフレート・フーゲンベルクらであり，一部は第1次大戦中，帝国議会の講和決議に反対して結成され「愛国教育」を強調する（マックス・ヴェーバーに酷評された）ドイツ祖国党にも参加していた。それぞれに見れば，トラウプは以前祖国党に属していたカップの反乱に参加し4日間の暫定政府に入閣している。帝政時代海軍大臣を務めたティルピッツはイギリスから第1次大戦の首謀者と考えられていたにもかかわらず，ヴァイマル期に国家人民党から首相候補として推薦されているばかりか，エーベルト死去後の大統領選挙（1925年）にも担ぎ出されている。同党の最も強固な代弁者であったヘルフェリヒは，1919年の尋問の際，いわゆる「短刀一閃伝説」を生み出すのに一役買っていた。第4次マルクス内閣に入閣したグレーフは，就任時に恒例のエーベルト大統領訪問を拒んでいる。これが原因となり代わりに内務大臣となったコイデル（彼の父親はビスマルクの青年時代の親友であった）は，学校教育問題に積極的に取り組んだが，彼の提案は憲法中に定められた宗派混合学校制（宗派の別なく宗教教育を行う学校体系）の原則[42] を破るものであった。それ以前にコイデルはカップ反乱にも関与していた。そして，大戦前クルップ商会の取締役でヴァイマル期にはウーファ映画社や『ベルリナー・ローカル・アンツァイガー』などの雑誌・新聞を統握し表現や情報の保守的管理・操作を行い得る立場にあったメディア・コンツェルンのフーゲンベルクは，ゴーロ・マンが語るように「始めから終わりまでこの（汎ゲルマン主義の）流れとともに生きてきた」人物であり，第1次大戦中も防衛戦であるという一般の理解とは別に「堂々とした戦争目標の設定」[43] に取りかかってもいる。このように彼らの活動内容を見るとき，その保守性は歴然としていた。

それ故，言うまでもなく，国家人民党のドイツ国憲法法案や旧帝国国旗黒白赤から黒赤金への国旗変更（1919年），戦後賠償論争，国際連盟加入問題（1926年），ヤング案闘争（1929年）など，いずれにおいてもヴァイマル共和国への徹底的反対の態度を固持している。

こうした活動経歴を持つ党にシュプランガーは例えば，フーゲンベルクの選挙声明に繰り返し署名するという形で公的な態度表明を行っている[44]。その一方で国家人民党に同調する旧ナショナリズム[45]の傾向は，彼の場合，ヴァイマル共和国の議会主義に対する秘かな反発となって表れている。とはいえテロリズムに対する嫌悪から極左政党については彼は明らかに危険視しているのはもちろんだが，社会民主党に対しては，あからさまな拒絶を示しているわけではない。例えば，同党機関誌『フォアヴェルツ』に対しては「穏健な国民的雑誌」とし，「社会主義的理念をいつも理解し，部分的には私にもあります」と述べている（P7, S. 97, 1918年11月16日父親フランツ宛の書簡から）。しかしいくつかの資料から，彼に社会民主党への距離感があったことを伺い知ることができる[46]。例えば，彼の成長期に宗教的な共感を与え合う場であった教会を避ける傾向が一般に発生した出来事を，（物質主義の波とともに）社会民主主義の影響に帰している点（P2, S. 144）や，ドイツ民主党（DDP）よりでプロイセン教育省大臣のカール・ハインリヒ・ベッカーに対して「政治的に一致することがなく」，ハンス・デルブリュックや違和感を持ちつつも共和制支持に回った友人マイネッケ，かつての恩師ヒンツェらとは別の立場に立ったと告白している点（P3, S. 147），第2次大戦後「ようやく民主主義に転向した」[47]と述べている点など，そうである。また，1921年に「学校改革の3つのモティーフ」というタイトルで『中等教育学校月報』に掲載された論文では，8年間の基礎学校案と予備学校廃止案を提示した社会民主党と歩調を合わせた「徹底的学校改革者同盟（Bund entschiedener Schulreformer）」を，彼は「現実感覚も歴史的感覚も持ち合わせない」「政党教条主義」とし，その家庭教育の機能を奪い去る試みを嘆いている[48]。さらに主著『生の諸形式』（1921年）においても，「『社会主義』というスローガンの背後には，意識の構造が失われてしまっている状態がある」[49]と言い，それ以前にも既に彼は1908年にベルリンの新聞「ターク」紙に「政治的教育」と名づけられた原稿を送り，そこで彼は「赤裸々でエゴイスティックな階級利害」によって担われ，「社会民主主義のアジテーター」によって掌握された権力に対して不満を表明している[50]。

けれども，シュプランガーのこうした政党への対応を見る場合，彼にとって特徴的であったのは，政党そのものへの期待感を彼がそもそも持っていなかったという点であり，そこから議会主義への不快感が発しているという点であろう。ヴァイマル共和国成立後まもなくして彼は「最近の政治的事象」について「客観性や真理に対する器官が，……死に絶え」，「『レトリックなもの』が人格全体をむさぼっている」とする政治批判を行っている[51]。彼が期待していたのは，政党でなくむしろ国家及び職業官僚制であった。「国家を旧来の政治的エートスの諸力から，特に職業としての官僚制度から革新することが（議会制民主主義の時代になっても）まだ可能である」（P3, S. 147，補足は引用者）と彼は信じていたのである。彼にとって国家は多様な利害を持った政党を越えたところに揺るぎない中心的権力を持つものであった。「平等が自由競争に対して堅持されるべきだとすれば，……中心的な国家権力が必要となる」[52]。殊に，1890年以後，ベルリンにおいて労働者大衆の登場と政党による解放運動によって，国家の統一的な秩序は内政的に（nach Innen）不安定になっていた。もちろん，シュプランガーにとって，自由と平等へ向けての時代の流れは必然的なものとして受け入れられている。けれども，それがあり得るのは，国家が一体性（Einheit）を保っている限りにおいてであった。「いかなる政党も国家を前提として意義を有する」[53]。国家は個人の合意に基づくようなものでなく，政党政府のように「民衆によって委任された権力」でもなかった。彼にとって国家は法的概念を越えていた。「法的構成や紙の上の憲法（無論，ヴァイマル憲法を指す）によってのみ与えられる権力は，全く取るに足りないものである」[54]（補足は引用者）。それ故，そのような国家の一体性は，シュプランガーによれば内政によって得られるものではなかった。むしろそれは外交において獲得されるものであり，同様に国民（Nation）も外に対して初めて国民と呼ぶに値するものとなるのであった[55]。国内に向けて存在する個人はまだ国家意識を自覚できず，個人主義的な利害，したがって政党的関心に拘束されており，その個人性を越えて個人は国民，換言すれば「政治的人間」となる。国民は外交というモメントを媒介として止揚された個人を越えた個，個人的利害を超えたものに奉仕し得る超個人的個であり，民主主義的個とは明らかに異なる規定性を持っていたのである。また一方，国民や国家というシュプランガーの概念には，道徳性（Sittlichkeit）が深く刻印されている。それは彼の自由概念にも見られる[56]。彼は自由を「物的拘束

からの自由」「他者による決定からの自由」,「低次の自己決定からの自由」の3つに分けたが，彼が最後に到達しなければならないと主張する第3の自由は，主観的な内的不和に一定の方向性を与える客観的な規範的価値を意欲する形式であった。それを彼は「内面的自由」や「道徳的自由」，さらには「自律」と言い換えている。そして，その自由は「真正の倫理的価値が支配している集団的道徳 (die kollektive Moral) に服従した後に到達される」[57]ような，プロテスタント的またプロイセン的なニュアンスを持っていた。政党の作り出す階級闘争の状態は，彼にとって低次の自由にとどまっており道徳的にも混乱であって，それが確かに歴史的必然であるとしても，国民国家的な契機と結びつくことによって均衡が維持されねばならなかった。「民主主義的原理が……全体意志を個人の算術的なとりまとめによって成立させる限り，民主主義は……内的な共属精神 (Zusammengehörigkeitsgiest) を作り出すことはできない」[58]。この「共属精神」が先の「集団的道徳」やそれが与える自由と同義なのは言うを待たない。彼が国家人民党に期待を寄せたのは，政党としての役割ではなく，彼がエートスを得たところの旧体制への要求がその党に掲げられており，彼自身が既に1920年に「議会主義と政党の精神」を批判したり[59]，「民主主義は……国民生活自身を危機に晒す」[60]と述べたりしているように，その党の要求に政党政治がもたらす議会制民主主義の分裂状態や道徳性の欠如への懐疑，数の政治に対する批判がそこに含まれていたからであった。シュプランガーが「教授生活」論文において「政党に属したことは一度もない」とわざわざ付け加えた (P3, S. 347) のも，以上のような政治観に基づいている。このような政治観を実践する上で，彼が政党や議会に代わって期待していたもの，それは職業的官僚制度であった。「官職が犠牲となるところでは，国家思想は死に絶える。一般的に言って，大学教師と同様に官吏も政党の機関ではあり得ない」[61]。このようにシュプランガーは，一方で官僚制度を国家の実働部隊として想定し，他方で大学教師を国家の支えとなるように「個人から国民へ」と育成する責務を負ったものとして考えている。これは彼の最晩年にも見られ，大学教師の職業エートスと政党とは結びつかないが故に注意深く留保することを強調している[62]。ここに認められるのは，「利害関係内個人，政党，民主主義国家」に対する「国民，官僚制度，プロイセン的国家」の優位という構図である。シュプランガーは無論，後者に立ち，旧体制的要素の保持とそのための国民育成を大学教師の役割としている。言い換えれば，その役割は「統合問題」[63]であった。つまり，新しく登場してきた労働者大衆を政治教育によって教養階層に取り込み，政党がもたらした社会的分裂状況を解決することであった。「この階級（労働者階級）を我々国民の (national) 生活に……組み入れるために，さらに多くのことがなされねばならない」[64]。そのために彼は「全教育制度をころころ変わる政党政治や政治的利害団体のくびきから解放し」,「プロイセン的ドイツ的な義務の思想において……自由，平等，博愛の間の均衡」を保ちつつ，「民主主義的平等精神に対する共同体精神」を作り出すことを目論む[65]。彼が国家や国民の概念に重きを置くのは，そのような政治的意識があったからである。とはいえ，大学教師までもが政党から距離を置いて考えられるのは，ドイツの場合当然のことであった。というのも，職種も異なり，官吏を作り出すという特別な任務を持っていたとはいえ，やはり大学教師も広い意味での官吏 (Beamte) だったからである。したがって，ヴァイマル期に入ってもまだ民主化の進まなかった大学世界を考慮に入れれば，シュプランガーが官僚制度擁護に回るのも十分理解できるところであろう。彼の国家人民党への共感と距離化は，以上のようなヴィルヘルム時代の政治観に背景を持ち，さらに言えば，彼の成長期に淵源を持っていたのであった。その意味でヘルマン・ヨーゼフ・マイヤーのシュプランガー評[66]とは反対に，彼は「国家人民党に共感しつつ対峙していた（保守革命論者では決してない）保守的改革者」であったと言えるだろう。

ところで，ゾントハイマーは帝政時代からの揺るぎない連続性を示しているヴァイマル期の大学教師たちの政治的立場を3種に分類している[67]。大多数を占めていた政治と学問を無関係のものとしたグループ（非政治的グループ），国家全体に対する責任において公益を政治的なものと見たグループ（30%程度），そして大学教師集団の持てあまし者で，政党政治の目標設定と自らを関係づけ直接公的な議論に関わったグループ（15%程度）の3つである。大多数派から見て政治は「ネガティヴで不快なものと思われ」,現実政治に参加することは「評価されるべき経歴の模範でもなく，むしろ否定的に評価されており」[68]，一般に政治に対する特別な関心は低かった。帝政時代からのこの政治的意識の連続性は，ヴァイマル共和国との現実的な非連続性を形成している。大学教師たちは原則的に民主主義的政治システムに対抗する学生たちの姿勢を歓迎し，様々の記念日に「ビスマルク帝国の理念に沿った祖国への献身を絶えず繰り返した」[69]。ゾントハイマーの指摘で最も重要なのは，大学教師の政

治的機能が「教育的影響力 (pädagogische Wirkung) の中に見出される」[70] ということである。このような彼の論述を参考にしてみるとき，シュプランガーの位置はさらにはっきりとしたものとなるであろう。すなわち，「エリートを作り出すエリート」として大学教師は，歴史的に教育的観点を有している。その観点は帝政崩壊とともにさらに重要性を帯びることとなった。第 1 次大戦以前から既にシュプランガーは国民育成の政治教育を強調していたが，生地ベルリンでの哲学講座を担当し教育にも積極的に関与する大学教師として彼は，学問的にもまた政治的にも大きな教育作用を及ぼすこととなる。しかも，彼自身がゾントハイマーのいう第 2 のグループに属していたことは，彼の影響力をいっそう強めることとなったことは間違いない。例えば，それは『生の諸形式』の学生への影響にも見られるものである。「当時『生の諸形式』は（ボルノーのような）世代の世界像やその世代に固有な生の解明のために重要な意味を持った」(S1, S. 462)。ボルノーは当時の学生たちが「共同生活の新しい形式を課題としていた」こと (S1, S. 461) を述べているが，シュプランガーのこの大著は「模索する現代の意識に現実存在の迷宮を貫くアリアドネの糸を与える」[71] ことを目論んだ点で，学生たちの希望と一致していた。しかもそれは，彼自身が学生時代にキリスト教に対して抱いていた確信と同じものを彼らに示している。それは既に先に示した「誇り高い理想が挫折してしまったところでも，生の可能性が存在する」というものであった。ここではその理想は今はなき帝政の中にまだ生き残っている理想であり，『生の諸形式』は戦争後の不安定な中でもなお生の可能性を模索し得ることを学生たちに示していた。このことは類型的方法による相対主義的外観を避けるために，シュプランガーがこの著作に倫理についての章をさいていることにも表われている。少々不十分であるが，このように『生の諸形式』という事例ひとつを取り上げても，そこに彼の大学教師としての教育作用を垣間見ることができる。それは，シュプランガーの幼少期に始まり，大戦後の民主化によって決定的なものとなった「望みなき相対主義」[72] を克服する試みであり，基本的には第 2 の大学教師グループに共通したものであった。「個人を越えた精神的連関の中へ個人の心的生活を編み込むこと」(P3, S. 348) という彼が自らの主著に与えた言葉は，彼の生活史を前提とした以上のような連関において意味を持っていたのである。

結びにかえて

以上を要約してみよう。

シュプランガーにとって，ベルリンの存在は非常に大きなものであった。ベルリンが彼に与えたものは，大都市へと変貌する過程で生じた大衆化や解放運動，それに伴う伝統的社会階層構造の変化，宗教的雰囲気の喪失，観点の個人化ないしは相対主義化，政党との対立関係による国家及び職業官僚制の動揺，こうしたものに対する危機感であった。また，一方でベルリンは若きシュプランガーに対してプロイセン国家の威信を示し，国家に対する義務と忠誠を日常的に感じさせる場としても作用した。そして，彼が学んだギュムナジウムは，時代の教育制度上の傾向と相まって，彼にプロイセン的なるものをさらに強く意識させるとともに，伝統的なドイツ的教養を与え，彼を最後のギュムナジウム特権世代のひとりとして育て上げたのであった。シュプランガーが後年絶えず根本的なものとして強調したもの，例えば，プロイセン的精神，プロテスタント的信条，変転する状況の中でも変わらぬ古典的な人間性の理念などは，こうした彼の成長期の時代背景に根拠を持つものであると考えられるが，今回限定したシュプランガーの政治的側面にも明らかに 1900 年以前が強く影響している。

しかし社会史的に見て，シュプランガーは，既に教養市民層的価値観が失われつつあった時期にその階層へ入り，それが部分的に解体した後でもなお，その階層の最後の砦である大学において喪失した価値の復興を試み続けたという意味において，「遅れてきた教養市民」でもあった。『生の諸形式』はそうした彼の成長期に形成されたエートスが，いわば学問化されたものであり，それによって旧来のエートスを再興しようとしたものだったと言えるだろう。それが公刊当時から多くの学生に受け入れられたのも，不確定で相対主義的な時代に一定の行動規範を与える形式的な材料として理解されたからであった。こうした点では『生の諸形式』は，思想史レヴェルではなく社会史レヴェルで，1920 年代の時代診断でもあり時代の危機に対して指針を示す回答でもある『存在と時間』（ハイデガー）や『歴史と階級意識』（ルカーチ）といった著作と類似した機能を果たしたと言えるであろう。そういった当時多く読まれた著作との相違は，『生の諸形式』が 1900 年以前の旧ナショナリズムのエートスで書かれたという点にある。また，このエートスはヴァイマル共和国におけるドイツ国家人民党への支持にも結びついていた。この意味で，ゴーロ・マンの次の発言は

シュプランガーについても十分当てはまることであろう。すなわち，それは「ビスマルクの失脚からヒトラーの最後に至るまでのドイツ史は不可避的に相照応する一貫した流れと見るべきではないか」[73] というものである。1890年から1945年までは，まさにシュプランガーの成長期と学者としての活躍期にあたる。そして，その最初の10年は，その後，断絶を与える様々な出来事があったにもかかわらず，彼の思想上活動上での連続的な展開を証拠立てる「原風景」，「原体験」だったと言うことができるだろう。1918年という転換点にも，また1945年の瓦礫の中にも，彼は1900年以前のイメージを投影している。ベルリンは「あらゆる生産的なもの，そしてあらゆる病的なものや過ちが圧縮されている」都市であり，彼はその断片をひとつの像として「個人の人生全体を通して……捉えようとした」(P1, S. 18) のであった。それは彼によって19世紀末に体験され，その後さらに深まっていった危機意識の（宗教上，政治上，学問上での）克服の試みだったのである。次稿ではベルリン大学学生時代を中心として取り上げ，今回取り上げられなかったシュプランガーの学的関心や宗教と時代状況との関係を把握するとともに，彼の政治的意識と学問との関係をも踏まえつつ本稿を展開させたいと考える。その際，今回自明のものとして扱われていた『生の諸形式』は，政治にとどまらず多くの領域に考察が渡っているので，本稿の試みを確証するのに十分役立つはずである。さしあたり，ここで筆を置くこととしたい。

註

1) 例えば，Bollnow, Otto Friedrich: Die Pädagogik des jungen Spranger. In: Zeitschirift für philosophische Forschung Bd. 28 Heft 2 Verlag Anton Haig KG. Meisenheim/Glan S. 161-179.; Löffelholz, Michael: Philosophie, Politik und Pädagogik im Frühwerk Eduard Sprangers 1900-1918. Helmut Buske Verlag Hamburg 1977.; Sacher, Werner: Eduard Spranger 1902-1933 Ein Philosoph zwischen Dilthey und Neukantianer. Verlag Peter Lang GmbH Frankfurt am Main 1988 など。

2) Hohmann, Joachim S.: Sinn, Wert, Zweck und Struktur in der Philosophie Eduard Sprangers In: Beiträge zur Philosophie Eduard Sprangers, hrsg. v. Joachim S. Hohmann Ducker & Humblot Berlin 1996, S. 127-264, S. 127

3) Bollnow: Die Pädagogik des jungen Spranger, S. 168

4) 例えば，日本では，新井保幸「帝政期およびヴァイマル期ドイツにおけるE. シュプランガーの政治思想」（教育思想研究会編『教育と教育思想 第12集』1992年），田代尚弘『シュプランガー教育思想の研究』（風間書房，1995年），長井和雄「若きシュプランガーとディルタイ」（『ディルタイ研究第10号』日本ディルタイ協会，1998年，53-64頁）などがある。最初の2つはヴァイマル期以降のシュプランガーを，最後のものはシュプランガーの博士論文を中心に取り扱っている。特に，田代論文はシュプランガーの現実的な政治的行動との関係で彼の思想の両義的性格を明らかにしている。また，そこで文献として用いられている文書記録，書簡なども現実生活からのシュプランガー理解にとっては非常に有益である。本稿との関連で言えば，その対象はナチス期の彼の行動に関心が限定されているが，田代論文の方法論的示唆は大きい。例えば，Hennig, Uwe/Leschinsky, Achim: Enttäuschung und Wiederspruch Deutschen Studien Verlag Weinheim 1991。これは1933年当時のシュプランガーに関する新聞記事や水曜会の講演など，時代状況と結びつけねばならない重要な資料を収めている。

5) 本稿で引用する文献については，シュプランガーに関する第1次文献 (Primärliteratur) 及び第2次文献 (Sekundärliteratur) に分け，引用頁とともにそれぞれ略号で記す。なお，文献は以下の通りである。

<u>1 Primärliteratur: Werke Eduard Sprangers</u>

P1: Eine Berliner Generation. (1946) In: Berliner Geist, Rainer Wunderlich Verlag Tübingen 1966 S. 11-19

P2: Min Eisegnungspfarrer Kirmss und die religiöse Situation in Berlin. (ca. 1950er) In: Berliner Geist.. S. 138-146

P3: Ein Professorleben im 20. Jahrhundert. (1953) In: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Bd. 10, hrsg. v. Walter Sachs Quelle & Meyer Verlag Heidelberg 1973 S. 342-360

P4: Aus der Chronik der Friedrichsstrasse. (1955) In: Berliner Geist. S. 20-28

P5: Was mein Leben bestimmte. (1955) In: Berliner Geist. S. 184-187

P 6: Kurze Selbstdarstellungen. (1961) In: Eduard Spranger. Sein Werk und sein Leben, hrsg. v. Hans Walter Bähr u. Hans Wenke Quelle & Meyer Verlag Heidelberg 1964 S. 13-21

P 7: Briefe 1901-1963 In: Eduard Spranger Gesammelte Schuriften Bd. 8, hrsg. v. Hans Walter Bähr Max Niemeyer Verlag Tübingen 1978

<u>2 Sekundärliteratur: Werke über Eduard Spranger</u>

S1: Bollnow, Otto Friedrich: Erziehung zur Klarheit. In: Eduard Spranger. Bildnis eines Geistigen Menschen unserer Zeit, Quelle & Meyer Verlag Heidelberg 1957 S. 461-465

S2: Bräuer, Gottfried: Eduard Spranger- Sein Leben und die Grundlinien seines pädagogischen Werks. In: Beiträge zur Philosophie Eduard Sprangers, hrsg. v. Joachim S. Hohmann Ducker & Humblot Berlin 1996 S. 27-47

S3: Krüger, Horst: Vom Brandenburg Tor zum Dom. In: Eduard Spranger. Bildnis eines Geistigen Menschen unserer Zeit. S. 99-105

S4: Scholz, Heinrch: "Ich hatt' einen Kameraden" In: Eduard Spranger. Bildnis eines Geistigen Menschen unserer Zeit. S. 441-452

6) 1900年以前で現在確認可能なものは，実際にはテュービンゲン大学図書館にある遺稿の「哲学一般は何をなし得るか」(Was vermag die Phiosophie überhaupt zu leisten?. 1893) や「感覚の美学」(Grundrißе einer Ästhetik der Sinne. 1898)，「モラルの本質について」(Über das Wesen der Moral. 1896-99) などがあるが，まだ入手できていない。

7) 父親フランツの玩具店がどれほどの規模のものであった

かは，はっきりしていない。一部には「大きな玩具店を営んでいた」(村田 昇編『シュプランガーと現代の教育』玉川大学出版部 1995 年 358 頁）とする説明もあるが，シュプランガー自身の発言から推測すれば，むしろそれほど大きくなかったと思われる。例えば，シュプランガーはその玩具店の 3 階に暮らしていたが，その隣にはそれよりも大きな，ニュルンベルク＝ファーバー文具店の建物 (Palast) があった (P4, S. 24)。これは相対的に父親の店が大きいと断言できないことの証拠であろう。また，シュプランガー一家は 1899 年ベルリン市東北部のシャルロッテンブルク街へと転居するが，その時期のフリードリヒ通りは既に一部のブルジョア階層に居住を残していただけであった (P2, S. 143)。後に父親の商売が不振となることを考え合わせても，フランツが大商業の経営者でなかったことは確かであろう。なお，1900 年以前のシュプランガーを概観する上で，註 5 であげた文献以外に参考としたのは，村田 昇編『シュプランガーと現代の教育』やシュプランガー『小学校の固有精神』(岩間 浩訳，槇書房）などである。

8) ベルリンの変化については，シュプランガーの証言 (P1, P2, P4, P5) の他，川越修『性に悩む社会』(山川出版社，1995 年，4-54 頁）や平井正編『ベルリン世界都市への胎動』(国書刊行会，1986 年）などを参考とした。

9) イレーネ・ハルダッハ＝ピンケ，ゲルト・ハルダッハ編『ドイツ/子どもの社会史。1700-1900 年の自伝による証言』木村育世ほか訳，勁草書房，1992 年，479-480 頁。

10) Geißler, Georg: Hermann Nohl In: Klassiker der Pädagogik II. hrsg. v. Hans Scheuerl Verlag C. H. Beck München 1991, S. 225，並びに，S2: Bräuer, S.27。

11) Croner, Else: Eduard Spranger. Persönlichkeit und Werk. Reuther & Reichard Berlin 1933, S. 7

12) 日本のシュプランガー研究者によれば「音楽家」となっていることが多いが，ブロイアーは「作曲家」と限定している。S2: Bräuer, S. 27 を参照。

13) 平井正編『ベルリン 世界都市への胎動』415-425 頁を参照。

14) Geißler, Georg: Hermann Nohl. S. 225

15) Klafki, Wofgang: Die Pädagogik Theodor Litts. Spictor Verlag Königstein/Ts. 1982, S. 7

16) マックス・ヴェーバー『政治論集 I』中村貞二ほか訳，みすず書房，1983 年，298 頁。

17) 殊にこれは，教養市民層を作り出すエリートである大学教師に決定的であった。例えば，彼らは講座担当者の娘と結婚し義理の息子となるケースが多かった。Vgl. Faulenbach, Bernd: Die Historiker und die "Massengesellschaft" der Weimarer Republik. In: Deutsch Hochschullehrer als Elite 1815-1945. hrsg. v. Klaus Schwabe Harald Boldt Verlag Boppard am Rhein 1988, S. 225-246, S. 232.

18) ユルゲン・コッカ『工業化・組織化・官僚制』加来祥男編訳，名古屋大学出版会，1992 年，80 頁。

19) 野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』講談社学術文庫，1997 年，13-52 頁参照。

20) ヴェーバー『政治論集 I』，順に 285 頁及び 266 頁。彼が教養について言及した 1917 年当時でも，中等教育制度改革後であるにもかかわらず，事態は変わっていなかった。それは大学が依然として教養の担い手であった十分な証拠である。

21) 註 7 を参照。

22) 19 世紀末の中間層については以下を参照した。ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー『ドイツ中間層の政治社会史 1871～1990 年』後藤俊明・杉原 達ほか訳，同文館，1994 年。柳澤 治『ドイツ中小ブルジョアジーの史的分析』岩波書店，1989 年。なお，文中の引用は，ヴィンクラー，同掲書 51 頁からのもの。

23) このパターンは，よく「2 世代に渡る出世」と呼ばれるが，おそらく初等教育教員から始めるとすれば，むしろ 3 世代に渡るものであったと思われる。フリッツ・リンガーは「初等教育教員や下級官吏にとって自分の息子を上席教諭や中級官吏することは，直ちに大学教師や高級官吏にするよりもよくあることであった」と言う (Ringer, Fritz: Das gesellschaftliche Profil der deutschen Hochschullehrer 1871-1933. In: Deutsche Hochschullehrer als Elite 1815-1945. S. 93-104, S. 102)。

24) Spranger, Eduard: Das Problem des Ausstieges. In: Kultur und Erziehung. Quelle & Meyer Verlag Leipzig 1923 S. 178-199, S. 185-186

25) ここでの大学教師の出自などに関する記述については，次のものを利用している。Ringer: Das gesellschaftliche Profil der deutschen Hochschullehrer 1871-1933. S. 93-104. なお，リンガーの論文も含め，そこに収められた諸論文は本稿の基礎資料のひとつとなっている。

26) 望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史』ミネルヴァ書房，1998 年，96 頁。

27) Datenhandbuch zur deutschen Bildungsgeschichte Bd. II: Höhere und mittlere Schulen 1. Teil. von Detlef K. Müller u. Bernhard Zymek unter Mitarbeit v. Ulrich Herrmann Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen 1987, S294-296。なお，ここではラテン語教授を行わない中等教育機関は全体に含み入れたほかは，省略してある。

28) Datenhandbuch zur deutschen Bildungsgeschichte Bd. II 1. Teil, S. 60-61. ベルリン以外のプロイセンの諸都市では，1880 年で多い順にブレスラウで 5 校，ケルンとケーニヒスベルクで 4 校，その他ギュムナジウムがあるのは合計 27 都市で，そのほとんどが 1 校を持つにすぎなかった。一方，1905 年ではギュムナジウムをもつのは 58 都市と増加しているが，それでもベルリンの優位は変わっていない。

29) ここで利用しているのは，川越修『性に悩む社会』(4-54 頁）と Datenhandbuch zur deutschen Bildungsgeschichte Bd. II 1. Teil (S. 60-61) である。

30) 例えば，1890 以後の世代としてやはりベルリン育ちのヴァルター・ベンヤミンを挙げて，彼とシュプランガーを比較してみると，直観的にもその違いが理解できるだろう。また，時期的にほとんど違いがないにもかかわらず，シュプランガーが青年運動に対して多少とも距離感を感じている点や，シュプランガーとほぼ同じ世代であるノールが「教育関係を世代から理解する」教育学を展開する点にも，いわゆる 20 年代の精神科学的教育学者たちに「世代の差異」が読み取られたからであると考えることもできる。その意味でシュプランガーの学的同僚で二つの世代のちょうど境界に位置するヴィルヘルム・フリットナー（1889 年生）は，考察に値すると思われる。例えば，彼は 1923 年に短期間ではあるが，社会民主党の構成員であり，この点でもシュプランガーとの差異を見せている。

31) 望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史』61-65 頁。

32) 大学教師だけでなく，ギュムナジウム教師も「プロフェッサー」となのっていた。また，彼らは 1848 年のフランクフルト国民会議に大学教師とともに参加するほどの社会参与意識も持っていた。

33) Ringer, Fritz: Das gesellschaftliche Profil der deutschen Hochschullehrer 1871-1933. S. 99. 彼は，ヴァイマル共和国の成立年である 1919 年よりも，むしろ

1890年を「重要な転換点」であると指摘している。

34) Ringer, ebenda S. 99.

35) Ringer, ebenda S. 101.

36) 例えば，1880年以降「文化」(Kultur) が強調され始めるのもその現れである。それは1920年代にはひとつの標語にまで成長するが，教養市民層の価値観を基礎づけることによって，当該階層の維持を図る試みでもあった。

37) Faulenbach, Bernd: Die Historiker und die "Massengesellschaft" der Weimarer Republik. S. 230. 大学教師に関する事情は，ヴァイマル期でもほとんど変わっていないので，ここでの引用は可能であろう。

38) Sontheimer, Kurt: Die deutschen Hochschullehrer in der Zeit der Weimarer Republik. In: Deutsch Hochschullehrer als Elite 1815-1945. S. 215-224, S. 218

39) ゴーロ・マン『近代ドイツ史2』上原 和夫訳，みすず書房，1987年，140頁。また彼は，「ヴァイマル共和国の政界，経済界で活躍していた」人々は，「全て皇帝時代からの人だった」(212頁) とも言っている。

40) ヴィンクラー『ドイツ中間層の政治社会史 1871～1990年』，23頁。

41) ドイツ国家人民党については，以下の資料を参考とした。エーリッヒ・アイク『ワイマル共和国史 I～IV』救仁郷 繁訳，ペリカン社，1983, 1984, 1986, 1989年。ハインツ・ヘーネ『ヒトラー独裁への道』五十嵐智友訳，朝日新聞社，1992年。ゴーロ・マン『近代ドイツ史2』。Wolfgang Benz u. Hermann Graml: Biographisches Lexikon zur Weimarer Republik. Verlag C. H. Beck München 1988 など。

42) ヴァイマル憲法の教育と宗教の関係は，非常に問題の多いものであり，それは教育の中立性を目論む社会民主党とカトリック政党の中央党との政治的妥協の産物であった。コイデルの提案は，宗派混合，宗派別，非宗教という3類型を併存，選択させるもので，(中央党のカトリックからの提案とは反対に) プロテスタントを代弁する宗派別教育であった。しかし，憲法の教育条項が中立性の点で既に問題であるとしても，ある種の意図を持っていた点，憲法の原則を破っている点がここでは重要である。

43) ゴーロ・マン『近代ドイツ史2』2頁及び86頁。

44) 1933年6月13日付けの「ベルリナー・ターゲブラット」紙の記事にこの事実は確認できる。(Vgl.: Hennig, Uwe/Leschinsky, Achim: Enttäuschung und Wiederspruch. S. 51)

45) これはゾントハイマーが国家社会主義労働党などのヴァイマル期に誕生した新興極右勢力と区別するために名づけたものである (Sontheimer, Kurt: Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Deutscher Taschenbuch Verlag München 1994.)。シュプランガーの政治的立場を考察する際に注意しなくてはならないことは，彼が旧ナショナリズムに属しており，ヴァイマル期に共和制と同時にこの古い保守派にも不満を表明した新ナショナリズムには距離を取っていたことである。この事実を看過すれば，彼とナチズムとの関係を見誤ることになる。

46) この点で，シュプランガーの政治的歩みに「社会主義へと進むことはなかったが，……社会民主主義に共感しつつ対峙する民主主義者への転換」(Eduard Spranger Gesammelte Schriften Bd. 8 Max Niemeyer Verlag Tübingen 1970, Nachwort S. 415) が認められるとするマイヤーの評価は，意図的にシュプランガー擁護に回っていると言わざるを得ない。なお，国家人民党と彼との関係は，田代尚弘『シュプランガー教育思想の研究』でたびたび言及されているので，本稿では第1次大戦前から活動していた社会民主党との関係を明らかにすることとした。

47) Rückbulick. In: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Bd. 10, Quelle & Meyer Verlag Heidelberg 1973 S. 428-430. S. 430

48) Spranger, Eduard: Die drei Motive der Schulreform. In: Kultur und Erziehung Quelle & Meyer Verlag Leipzig 1923 S. 115-137, S. 118

49) Spranger, Eduard: Lebensformen (1921) Max Niemeyer Verlag Tübingen 1966, S. X

50) Löffelholz: Philosophie, Politik und Pädagogik im Frühwerk Eduard Sprangers 1900-1918, S. 56

51) Spranger: Lebensformen. S. 218

52) Spranger: Die drei Motive der Schulreform. S. 118

53) シュプランガーの「学校と教師」(1913年) からの引用。Löffelholz: Philosophie, Politik und Pädagogik im Frühwerk Eduard Sprangers 1900-1918, S. 70

54) Spranger: Lebensformen. S. 224

55) Löffelholz: Philosophie, Politik und Pädagogik im Frühwerk Eduard Sprangers 1900-1918, S. 70

56) Spranger: Lebensformen. S. 214, S. 227-229

57) Spranger, ebenda S. 229

58) Spranger: Die drei Motive der Schulreform. S. 118. 彼のこのような考えはヒトラーの政権掌握の時期でも変わっていない。「現代人の良心は，さしあたり素朴な表現をすれば，非常に個性化されており，そのために共通なもの (ein Gemeinsames) を構成すること，いやそれどころか深遠な良心の前において国家的意志の結集という形態をとって義務を構成することを以前よりも困難にしている」(Spranger, Eduard: Die Individualität des Gewissens und der Staat. In: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Bd. 8 S. 1-33, S. 2)。

59) Hennig, Uwe/Leschinsky, Achim: Enttäuschung und Wiederspruch. S. 74

60) Spranger: Die drei Motive der Schulreform. S. 124

61) Gegenwart (1932). In: Spranger, Eduard: Volks・Staat・Erziehung. Quelle & Meyer Verlag Leipzig 1932, S. 176-211, S. 199

62) Der Universitätlehrer als Erzieher (1961). In: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Bd. 10 S. 391-405, S. 402

63) Löffelholz: Philosophie, Politik und Pädagogik im Frühwerk Eduard Sprangers 1900-1918. S. 59

64) Spranger: Das Problem des Ausstieges. S. 187

65) Spranger: Die drei Motive der Schulreform. S. 122, 137 und 128

66) 註43を参照。

67) Sontheimer: Die deutschen Hochschullehrer in der Zeit der Weimarer Republik. S. 216-217

68) Sontheimer, ebenda S. 217 und S. 218

69) Sontheimer, ebenda S. 220

70) Sontheimer, ebenda S. 223

71) Spranger: Lebensformen. S. XII

72) Spranger: Lebensformen. ebenda

73) ゴーロ・マン『近代ドイツ史2』2頁。歴史学の領域では1933年を断絶としてみるよりも，連続として捉える動きが顕著だが，この問題は1918年についても当てはまるだろう。